

帯笑園保存会 会報

発行元 保存会事務局
 発行責任者 植松 善夫
 2007年01月27日
 No. 003

「叟花園記」石碑について

植松 靖博

我が家の庭の、南東の隅に大きな石碑があります、これにはかつての帯笑園の規模と内部の様子と、そこに植えられ、栽培されていた草木の品名、数量などが盛り込まれた帯笑園の撰文が刻まれています。

この碑について言い伝えられている事々と、諸先生方の調査研究により判ったことなどについてお話ししたいと思います。

碑そのものは文政十年（一八二七年）当家七世與右衛門季興画号応令五三歳の時に建てられました。余談ですが、この応令は十三歳のときに京の圓山応挙に師事し



応挙より応令の画号を授けられました。

まず、碑文についてですが、撰文を皆川淇園に依頼したのです。皆川淇園は江戸時代後期の儒学者でもあり一方池大雅派の画家で、字義にも詳しく彼の文章は当時高く評価されていたので彼に碑文を書いて貰うことにしたのでしようか。淇園は南画派でしたが帯笑園と縁の有った圓山応挙、岸駒はもとより池大雅や呉春なども交流をしていました。そこで六世與右衛門季英蘭溪は天明四年（一七八六年）に、かねてから交誼を得ていた、圓山応挙を通じて園記を依頼し二年後の天明六年六月淇園五三歳の時に受け取りました。この件についての蘭溪・応挙・淇園間の書簡があり、原の植松家と京都の画壇文人との関係がよく判ります。

碑が建てられたのが文政十年（一八二七年）季興画号応令五三歳の時です。から碑文が出来てから約四一年後に完成と言う事になります。

篆額は四七代日野大納言（公家、准大臣、参議）の書で、篆書で「叟花園記」と彫って有ります。本来は「帯笑園記」とあるべきですが、この時期にはまだ「帯笑園」の名はなく「叟花園」又は「菊花園」と呼ばれていたようです。

では、何時ごろに「帯笑園」と名付けられたのでしょうか。文久元年（一八六一）年に高島秋帆に帯笑園という扁額を揮毫して貰ったとの記録がありますので、帯笑園と名付けられたのはその頃ではないかと思われておりましたが、何時、誰によって名付けられたのかは不明でした。ところが、平成一五年に、沼津市役所史編纂室（当時）の宮下義雄氏が当家古文書中の「狐白裘（こはくり）」と題した海保青陵の書に「帯笑園由縁」の記述が有るのを発見

してくださいました。記述によると、その当時奇遇をして居た青陵が当家六世蘭溪の求めに応じて、翁の徳とその容貌と客人をもてな



し、草花を愛でる様子を写して帯笑園と名付けたとあります。その時期は宮下氏によると寛政三年（一七九一年）とされています。蘭溪六二歳その息子応令が十七歳の時です。

皆川淇園の文章を江戸後期の三蹟のひとり巻菱湖がこれを筆写し碑面の彫文字としました。しかしこの時点で起草から約四一年を経過していますので、当然ながら園の規模及び花卉類の有り様が変わっており、筆写の際に修正追加を行っています。これで原稿が出来上がったわけですが、これから石にこの文字原稿を彫らなければなりません。

この彫りを担当したのが廣瀬群鶴と言います。群鶴は明和九年（一七七二年）から東京上野の谷中で石工業を営んでいる石屋でした。この石屋は代々名工で江戸時代の良い石碑、墓石はこの一家によるものが多く、その作品には「廣群鶴」と銘を入れています。この碑については特に名工と言われた五世群鶴のものと研究家はみえています。しかし残念ながらこの石屋は昭和三〇年代に廃業したそうです。

次に碑の裏面についてのお話しですが、裏には岸駒が描いた「虎」の絵が彫られています。勿論彫りは群鶴です。石碑の研究家嘉津山清氏によれば碑の裏面に絵がある事が大変珍しい事だそうです。岸駒は圓山応挙とほぼ同時期に活躍した画家で山水・花鳥・獸類が得意で特に虎を描かせたら当代一と言われていました。植松家では蘭溪、応令、蘭丘の三代と岸駒はもとよりその嫡子岸岱と二代に亘っての親交でした。

この絵について謎が二つあります。と申しますのは、撰文の碑の



裏に何故「虎」の絵があるのでしょか？ 次に、この絵の版木が見つかりましたが何故版木が存在するのかよく判りません。どうして版木又は版画が必要だったのでしょうか。もしお判りでしたらご教示願います。

最近、浜側に抜ける道の交通量が多くなり大気汚染のせいでしょうか、碑の表面に鉄分の錆斑や岩を浸蝕するコケの白斑が増えており碑文や絵の彫りの鋭さが年々鈍化し年を追う毎に劣化が進んでいるようです。保存の手を早く打つ必要があると先生方よりご指摘をいただいています。この碑には江戸時代後期の「園」の有様や、少々大げさな言い方ですが「文化」が凝縮されて彫り込められている様に私には思えますので、早急に保存策を施し腐蝕劣化を止めて、次の世代に引き継げるようにしたいと思つて居ります。

以上諸先生方にお調べ頂いた事々を私流に纏めさせていただきますが、この文を書いてみて、改めて当時の植松の庭「帯笑園」が京都の文壇画壇と深く係わり、また、東西文化の中継地としての役割を果たしていたことなどがよく判りました。

参考 付録

巻 菱湖

書家、儒学者

安永六年〜天保十四年四月七日
一七七七年〜一八四三年

江戸後期三蹟

巻 菱湖

安永六年〜天保十四年四月七日
一七七七年〜一八四三年

市河 米庵

安永八年〜安政五年

貫名 崧翁

一七七九年〜一八五八年
安永七年〜文久三年

一七七八年〜一八六三年

高島 秋帆

砲術家

寛政一〇年〜慶応二年一月一日

一七九八年〜一八六六年二月二八日

海保 青陵

儒学者 経世家

宝暦五年〜

一七五五年〜一八一七年

日野大納言

資愛 (准大臣、参議) 第四七代

安永九年〜弘化三年

一七八〇年〜一八四六年

岸 駒

画家

寛延二年〜天保九年

一七四九年〜一八三八年

岸 岱

画家 (岸駒の子)

一七八〇年〜一八六四年

参考文献

沼津市博物館紀要 二八号

原宿植松家「帯笑園」由来 宮下義雄

「植松家と文人墨客」一東海の名園に遊ぶ一

佐野美術館

日本桜草鑑賞会

二〇〇六年四月二十九日に恒例となりました日本桜草歓送会を日吉の真野様にご協力頂き開催致しました。

約八十鉢の日本桜草を展示し、大勢の皆様にご鑑賞して頂きました。

見逃された方は、今年も開催されると思いますので、是非、ご覧下さい。





帯笑園見学会状況

二〇〇六年には、左記の通り計十回の見学会を行いました。状況は、次の通りです。

・	一月二二日、	八名
・	二月一九日、	一〇名
・	三月一九日、	一九名
・	四月一六日、	二四名
・	五月二一日、	一三名
・	六月一八日、	二七名
・	七月二三日、	二二名
・	十月二九日、	二〇名
・	十一月一九日、	一六名
・	十二月一七日、	二四名
計		一八三名

平成一五年からの累計では、七一〇名となります。



編集後記

本号を発刊するにあたり、叟花園記石碑について、植松本家十三代ご当主、植松靖博様にそのいわれについて、記事をお願い致しましたところ、立派な解説を頂きました。心よりお礼申し上げます。これにより帯笑園の歴史的眞価が深く理解されるのではないかと思います。

保存会の活動は、地味ではありますが、息の長い活動だと思います。見学会・奉仕活動、桜草の展示会等々、皆様のご協力により、進めていきたいと思っております。今後共、よろしくお願ひ申し上げます。